

# アカアマダイ栽培基礎調査

内田 浩

## 1. 研究目的

アカアマダイの増殖技術を把握して、島根県に技術導入できるのか検討する。また、現状の漁業実態および資源状態を把握する。

## 2. 研究方法

### (1) 増殖技術の現状把握

親魚養成から種苗放流に至る、アカアマダイ増殖技術の現状を、聞き取り調査や文献等の整理等により整理した。また、宮津栽培漁業センターで種苗生産されたアカアマダイ稚魚(全長50mm)を、水温、餌料及び収容密度についての条件を設定して飼育し、生残、成長を調査した。

### (2) 漁業実態(基礎資料収集)

平田市漁協の佐香支所において市場調査を実施し銘柄別の体長組成を把握するとともに生物調査から銘柄別の平均体重等を把握した。また、小伊津漁港においては出漁日別、船別、銘柄別漁獲量の資料があり、それを整理した。

## 3. 研究結果

### (1) 増殖技術

増殖技術は発展途上にあり、親魚養成方法は確立されておらず、種苗生産には浮上斃死が発生することや形態異常の割合が非常に高いことが分かった。したがって、現状の生産技術を導入しても、種苗生産の生産率は非常に低いと考えられた。また、放流の再捕状況も非常に低く、再捕報告があるのは京都府沿岸で放流された個体のみであった。

### (2) 中間育成方法(平成16年4月以降も中間育成は実施しているが、3月末までの結果。)

各水槽の生残率は、96~99%(形態異常魚の除去は除く)と非常に高く、斃死はほとんどなかった。種苗生産の技術は確立されてないものの、全長50~70mm程度の飼育は比較的容易であると考えられた。成長は、加温(17℃)区で早く、1月中旬の全長50mmから3月末には全長93mmに成長した。同時期の自然水温区は、全長72mmであった。また、餌料は主に配合飼料(トラフグ用)を用いたが、配合飼料にさらに冷凍アミを加えた区と比較した結果、成長差は無かった。したがって、配合飼料のみの飼育でも十分可能であると考えられた。

### (3) 漁獲動向

漁獲量は大きく変動することが分かった。平田市漁協佐香支所(旧佐香漁協)の漁獲量は、100tを超える時期もあったが、近年は30~50t程度で推移している。また、推定された体長組成から、漁獲の主対象になっているのは低年齢群であり、加入量に変動があることが分かった。